
神理郷 ~ ゴッドピア ~

羽崎 暮斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神理郷 〜ゴッドピア〜

【Nコード】

N4717X

【作者名】

羽崎 暮斗

【あらすじ】

2745年、日本。

かつての『東京』を中心に、めまぐるしい発展を遂げた現日本の首都『神都』。

科学技術も日々発展し、『優秀な人材』の『特殊な教育』に力を入れる神都。

神などというものは忘れ去られ、人々は進化を遂げた。

人と神、科学と神話の織り成すサイエンス神話ファンタジー。

当作品は、某『とある』作品に感動したウマシカな作者が、大して溢れないアイデアを見苦しく詰め込んだ作品になっております。

2

2次ではないです。

パロディでもないつもりです。でもパロディになってますね。ええ。

『とある』の中の人は出ませんよ。一応ね。

『妙にリアルなファンタジー』を目指して頑張っております。

暇すぎて死んでしまいそうな人はぜひ見てね

邂逅　↳　煉獄の王妃　↳　（1）（前書き）

邂逅　く煉獄の王妃　（1）

「はあ……」

と、通話状態の携帯電話を切り、迦具土凍也かぐつちとうやは深く小さくため息をついた。

ベッドの上であぐらをかきつつ、自室の天井をしばし見上げ、また一つため息をついた。

「……しゃーないか……」

のそつとベッドから降りると、迦具土は身支度を始めた。

鏡を見ながら寝癖で暴れる髪を直し、一部が生まれつき白くなっている前髪をいじりながらまたため息。

部屋の中央にある座椅子にかけてある濃紺のズボンを取り足を通す。

何やらおぼつかない手つきでベルトを締めると、次は部屋の壁にかけてある半袖のカッターシャツに袖を通す。

因みに、迦具土は高校生で、現在は夏休み初日である。

いつまで寝ていても誰にも何も言われない、そんな素敵な日々の始まりの朝に身支度を始めた訳は……

「まったく……しょうがねえじゃんよお。元はと言えば、『会長』が自分の仕事を俺に押し付けたりすつから……出席日数足んなくなるんだつつの」

~~~~~

「おや、迦具土。こんな朝早くからご出勤かい？」

身支度を済ませ、自室を出て、建物から出た所で不意に話しかけられる。

頭にバンドナを巻いて上下緑ジャージにフリル付きエプロン、右手に箒、左手にちりとりといった格好の若い女性だ。

「咲子さん…。知ってるくせに…。咲子さんこそ、こんな朝早くから掃除なんて、珍しい事もあるもんすね」

センスを疑わせる格好はスルーし、少々皮肉気味に会話を  
する。

「はっはっは、まあがんばんな。あたしは暑いのは苦手だからね、涼しい朝のうちに仕事を済ませようと思ったのさ。というか迦具土よ…」

そこで言葉を切り、女性は迦具土の横に歩み寄り、迦具土の肩に左腕をまわす。

「今の言い草、まるであたしが仕事してないみたいじゃないか。ん

「？」

ギリギリギリ…と、肩にまわされた腕に力が入り、迦具土の首が圧迫される。

「あ、すみませんすみません。この寮は咲子さんのおかげで綺麗に清潔に快適に保たれております」

「そうだろそうだろ。お前らの飯だって、みいんなあたしが作ってやってんだからな。感謝してるかこのガキンチョ」

「4人しか居ないけど」

「なんだってえええ？」

ギリギリギリ…ギチギチギチ…と、渾身の力が込められていく。

余計な事を言うんじゃないやなかった。時すでに遅しである。

「あだだだだ、すみませんすみません。しています。メツチャ感謝しています。——てか胸えええ！」

思い出したかのように、迦具土は叫んだ。

上手く決まっているらしく、もがいても抜け出せない。現在、迦具土の後頭部には、幸せな重みがズシリと乗っかっている。

「ん？なあに興奮してんだい、このエロガキ」

「違う！いいから離せ！離して！離して下さい！」

やっとの思いで開放された迦具土は、自分でも赤くなっている事がわかるくらいに、顔が熱っぽかったので、慌てて女性から目を逸らす。

「はっはっは。真っ赤になっちゃってえ。このムツツリスケベ」  
「ッ——、あんたなあ……もつとこう……女らしくできねえのか！」  
「はんッ。なめられるのは御免だよ。それにね、あんたみたいなガキンチョに触られたって何とも思わないんだよ。そんなに触りたきや触ってきな」

女性は、上半身を折り、交差させた腕に、豊満に実りすぎた果実を乗せ、首をやや傾げ、斜めからの上目遣いで迦具土を見つめる。

「——ッ——逆セクハラだああ！」

迦具土は堪らず走り出した。これ以上は理性とかなんとか、大事な物が吹っ飛びそうになったからだ。

その背中を、女性は大らかに笑いながら見送る。

彼女、楠木咲子くすのきさきこ（25）は、迦具土が住む小さな小さな寮、『常盤寮』の現管理人である。

元は、彼女の両親が切り盛りしていたのだが、去年、主人の方が病気を患い、両親は現在、実家で静養中だ。

生徒達を追い出す訳にもいかないし、小さな寮だから一人でも大丈夫、と、彼女が管理を申し出たのだ。

寮とは言っても、どこその学校や企業などと提携している訳ではない。

分類としては個人経営の『下宿』なのだが、外観が小さなオフィスビルみたいなものなので、主人が名前を付けただけなのである。法に触れていないかどうかは怪しい所だが。

つまり、『常盤寮』と言う名の『下宿』なのだ。

そして彼女、楠木咲子は……美しい亜麻色のポニーテール、

整った顔立ち、抜群のスタイル、爆ぬー。

そんな思春期を悩ませる問題を山積みに抱えている彼女は、近所ではかなり有名な美人なのだ。

そんな人に胸触つていけなんて上目遣いで言われようもんなら、理性なんて物は砲台に込められた砲弾の如く意図も簡単に吹っ飛ばされてしまうだろう。

迦具土も男である。揉みしだきたい衝動がなかったと言えば嘘になる。

据え膳食わぬは何とやら。がしかし、恥をかいてでも守らねばならない物はちゃんとあるのだ。

そう、人として。

「……そついやあの子、朝飯はよかつたのかね？」

~~~~~

「——つたく…朝から面倒な…」

常盤寮から最寄りの駅に駆け込み、改札のIC端末に携帯をかざし通り抜け、発車寸前だった電車に飛び乗った。

失敗した…と、迦具土は思う。

時刻は7時34分。夏休みだから、学生こそいないものの、大人達は休みではない。いわゆる通勤ラッシュだ。

普段、学生達は、これより一本早い、もしくは遅い電車に

乗り込む。

この時刻の電車は、大人率が異様に高いのは、この辺りではポピュラーな事なのだ。もちろん、迦具土もわかっていた。

駅のホームに着いた時に、電車のドアが閉まる時の音が聞こえ、慌てて駆け寄ったはいいが、大人がぎゅうぎゅうに詰まっているのを見て、一度は足を止めたのだ。

しかし、急に駆け寄ったもんだから、閉まろうとしていたドアが一度止まり、再び開いた。

一度止めてしまった手前、乗らないなんて事はし辛かったのだ。大人達の視線も少し痛かった。

(…おっさんに圧迫されて誰が嬉しいんだか…)

と、ドアと中年男性に挟まれ、顔をしかめながら迦具土は思う。

こんな風に他人と体が密着するなら、可愛い女の子か、綺麗なお姉さんの方がいいに決まっている。迦具土も男である以上、その考えはぬぐいきれない。

そんな事を考えても意味無いのはわかっている迦具土は、特に何を思う訳でもなく、窓から街を眺める。

——
神都。しんと

これが現在、迦具土が生活する街の名前だ。

『街』と言うより、『国』と言う表現の方が正しいのかもしれない。

24世紀後半より26世紀にかけて、目まぐるしい発展を遂げてきた、現日本の首都である。

2745年現在、もはや神都の機能は、『街』としての域

を超越し、『国』としての性格を持ちつつあるのだ。

かつての『東京』を中心に、発展に発展を重ね、その総面積は、9,136?。イメージとしては、『四国』の半分とほぼ同等、という事になる。

その広大な神都は、内部を108つの『区』に分けられる。各区は『番区』と呼ばれ、それぞれの区ごとに、性格や管理体制は異なる。

が、一応、大まかな分類は存在する。

- ・ 1～64番区、『行政区』
- ・ 65～96番区、『教学区』
- ・ 97～108番区、『特殊管理高等区』

と、分類される。

『行政区』は、文字通り『行政』、国の運営を管理する区間である。

神都における、ありとあらゆる商工業や財行政を64の区間のみで仕切っている。

その中でも、1～12番区は、『中央統括行政区』と呼ばれ、神都、ひいては日本の行政を管理する程の高等区となっている。

『教学区』は、保育園から大学院まで、ありとあらゆる教育機関が存在する区間である。

保育園から大学院、すべての教育機関が揃う区もあれば、高等学校しかない区など、各区によって教育体制が異なっている。

神都は、『特殊な教育』に力を入れており、日々『優秀な人材の開発』が行われている。

各区の管理は、その区の最高等教育機関が受け持つ。

量販店や飲食店などももちろん存在する。しかし、その管轄は行政区ではなく、その区の最高等教育機関に任される。

『特殊管理高等区』は、行政区では行われぬ、『開発・研究』を主とする区間である。

表向きに公表している情報が極端に少なく、内部事情を把握している者は数少ない。

そして、これらの区は、中央統括行政区と特殊管理高等区を神都の中心に、その周りを教学区、さらにその周りを行政区が覆う様に存在している。

迦具土の事を言っておくと、彼が住む常盤寮は60番区。全体が住宅街の様な区の、隅っこの方に肩身狭そうに建っている下宿だ。

そして現在、迦具土は65番区にある、自身の通う学校『楔月学園』へ補習をしに向かっていると云う訳だ。

『楔月学園前』、楔月学園前』

と、車内に人口音声の独特なアナウンスが流れる。車掌等は居ない。電車は全てモノレールの様な仕様に変わり、操縦も全てコンピューター制御。万が一に備え、駅から走行中の車両の衛星監視と、コンピューターへの干渉をしている。

そこまでするなら、車掌が居た方が良いのでは？と思わなくもない。

「……………ん？…やべっ」

すっかり人が減り、座席に腰掛けてウトウトしていた迦具土は、慌てて電車から降りる。

ホームを出て、改札のIC端末に携帯をかざし、駅を出る。駅を出て、ため息をつく。目の前には、広大で美しい広場。中央には噴水なんて洒落た物もある。

そしてその広場の先には、一見、どこぞの巨大な屋敷にしか見えない、楔月学園の校舎が堂々と佇んでいる。

しかし、その風景の中に、人は数える程しか居ない。

スーツを着た女性、背広を着た男性、恐らくは教師だ。迦具土が見知っている人も居る。

迦具土と同じく、制服に身を包んだ人も居た。

(…補習か、自業自得だな)

自分の事を棚にあげて思う。迦具土の場合は少々事情が違うのだが、同じく補習には違いない。

(……そっぴや朝飯…忘れてた)

寮監、楠木との無駄な絡みさえなければ、駅の売店でおにぎりか何かを買ってくる予定だったのだが、頭の中は爆乳祭りだったので忘れていた。

(今日は購買も開かんしなあ……)

ドカツ と、噴水横のベンチに腰をかけた。

補習開始時刻は朝のHRと同じく8時50分。

それこそ売店なりで買った朝飯を教室で頬張るつもりだったのだが、前記の通りである。

最寄りのコンビニまでは徒歩で20分かかる。

田舎とかそういう事ではなく、楔月学園の敷地内にコンビニ

二等の店が無く、しかも広すぎるのだ。

小中高一貫の学園で、小等部・中等部・高等部のそれぞれに校舎があり、グラウンドや体育館やプール、寮などもそれぞれ完備されている。迦具土がこの学園の寮に入っていないのは、ただ単に寮費が馬鹿高いからである。

「んや？ツッチーでないのさあ」

コンビニまで行くのを渋り、噴水横のベンチにほされた布団の様に腰掛けてみると、ふいに声をかけられる。

迦具土にとっては聞き飽きた声。

「……………柴崎……………鴻薙……………」

体を動かすことは無く、首だけを正面に向ける。

声をかけて来たのは迦具土の友人、伝説の『オオサカのおばちゃん』ばりに目障りな程『紫いいい』と主張する紫へアをワックスで固めてツンツンにし、ホストの様にシャツをはだけ、目に掛けるわけでもないサングラスをはだけたシャツに引っ掛けて歩く、『恥部』こと『柴崎秋道』と、その横には、上質な絹を思わせる美しい白髪を後頭部で括っており、何を考えているのかわからない糸目に常に上がり気味な口角、柴崎とは対照的に整った服装、細すぎる体、『もやし』こと『鴻薙華川』の2人が近づいて来る。

「なっはっはー。ツッチーも補習かあ？」

「……………ああ」

会話すらしんどい気分の迦具土は、生氣薄く聞き流す。

「んん？いつもの毒舌はどうしたいツツチーよ」

「……………黙れ喋んな俺の視界から直ちに消え失せるこのムラサキバフンウニ」

「……………つはあく効いたあく、今のは効いたわ。朝一にムラサキバフンウニはひでえよな、せんちゃん」

「うんうん、かわいそうなバフンウニだね」

『せんちゃん』と呼ばれた少年は、左手を顔に当て、右手で柴崎の肩を叩いた。

「ウニじゃねえ！」

「……………んじゃあ、紫色の馬糞」

「不健康だな！病院行かなきゃ！」

「……………病院より先に美容院に行つてこい。腕のいい脳外科医なら後で紹介すつから」

「お、今日はやたらと頭部を攻めて来るじゃないか。破壊報酬など出ないぞお」

日干しされてる昆布みたくだらけてる迦具土は、もはや頭も上げずに柴崎を罵倒する。

ウルト マンの様なファインディングポーズをとる柴崎。

そんな2人のやりとりを、鴻雛は我が子を見守る母親の様な目で見ていた。

「毎度毎度目障りなんだよ。抜くか千切るか筆るか刈るかどれかにしろ」

「禿げる以外の選択肢はないのか？」

こんなやりとりを、何を理解したのか、頷きながら見てい

る鴻雑に柴崎は「何がウンウンだ！」と叱咤している。

「くそお、お前ら2人して紫を馬鹿にしおってえ…！」

「いや、馬鹿にはしてねえけど…頭に着ける色じゃねえだろそれは」

「いいじゃんいいじゃん！何がいけねえのさあ！」

「お前ただぞ…名前に『柴』があるからって頭を紫にするやつ。言っとくけど漢字違うかな」

「へ…？」

「……お前の『柴』は『紫色』じゃなくて『柴犬』の『柴』な」

「……………」

硬直。

衝撃（？）の事実を突きつけられた柴崎は、世界が壊れたかの様に立ち尽くす。

（こいつ…今までの人生ずっと勘違いしたままだったのか？）

『ゴーン…ゴーン…ゴーン…』

どの位この場所でだらけていたのか、朝のHR前の予鈴を告げる鐘がなる。

楔月学園のチャイムは、通常の学校のチャイムとは異なり、重厚な鐘の音が響く。協会の鐘を大きくした様な物が、敷地内の中央に設置されている。名前は『鈴鐘塔^{りんしょうとう}』。

「おや、もうそんな時間かい？」

せんちゃんこと鴻雑が鐘の音に反応し、腕時計を見た。そ

の腕は『体脂肪ってナンデスカ?』と語りかけて来る。時計も、一番締まる穴で留めてるにもかかわらず隙間がある。

迦具土は何回見ても「細っ」と思うが、口にはしない。

鴻雛は170後半程の背丈があるのだが、あまりの体脂肪の無さに、擬人化もやし当然である。

「遅れると面倒だ。そろそろ行こうか」

「…ああ。おい、行くぞ柴崎」

ほけ〜っと突っ立っていた柴崎は、迦具土の呼びかけにピクツと反応し、少し考えた後…

「…まあ…似た様なもんだし?」

と、満面の笑みで言い放つ。

(そういう問題じゃねえ)

と思ったが、めんどくさいので心にしまっておこうと決めた迦具土であった。

邂逅　↳煉獄の王妃　（1）（後書き）

改稿したら2話とも2話になった（^^；；

気づかなかった間に読まれた方にはなんとお詫び申し上げねばいい
やら）^^；；

どうもすいませんでしたm　——　（　m

(2) (前書き)

長すぎる導入部から少し話が動きまっせ)。。(ノ

(2)

~~~~~

迦具土達は何やら広い空間に居た。

この場所は『講堂館』2階、『第四講堂』。

講堂館とは、楔月学園の中心部にある鈴鐘塔から北の方角の高等部校舎を挟んで対称の位置にある施設である。

4階建てで、1つの階に講堂が2つもある。

ぶつちやけ、楔月学園の生徒にとっては、集会や特別講師を招いての講義位でしか使う事のない施設だ。

しかし実際は、様々な検定試験や、オープンキャンパス、入試、65番区の重役を集めての会議など、結構需要のある施設である。

「ふああ…あ…」

迦具土は講堂内の豪華な内装には目もくれず、無機質だが高級な椅子に腰を掛け、背伸びをした後、同じく無機質だが高級な机に突っ伏した。

横に3つの椅子が並び、その前には一繋がり横長な机、一人分程の間隔でタッチパネルのようになっており、その正面には小型のモニター、その横からは、広い講堂内に声を響かせるための細いマイクが伸びている。

そのセットが横に5つ、縦に12程並ぶ空間の左端列、前

から6番目のセットに迦具土達は腰を掛けた。

左端に柴崎、中央に迦具土、右端に鴻籬が座っている。

「眠いのかい？僕もさ」

「……知らんがな」

返答に困る言葉を半ば欠伸をしながら掛けてくる鴻籬をあしらい、目を瞑る。

「昨日も『仕事』だったのか？」

「……まあな」

腕を組んで突っ伏している迦具土の頭は、現在右を向いているので、後ろから聞こえる柴崎の問いに、特に向き直る事もせず応える。

「なっはっは。相変わらず大変だな『副会長』さん」

「……るせえ」

「しっかし羨ましいぜえ。あの麗しの『会長』様に毎日会えるなんてさあ」

「代わりたきゃいつでも代わってやるよ」

「マジか！」

「ああ。だからさっさと当選しろよ」

「……」

「『蓮神会役員選挙』か。次はいつ頃だったかな？」

「……12月上旬な。てか、絶対に鴻籬が出た方が可能性高えのに」

「僕は表舞台は嫌なのさ。アキの応援を続けるよ」

「……柴崎にお前以外の票が入った試しがあつたかよ」

「……」

「ないね。それに、凍也がいるから誰も副会長にはなれないじゃないな」

いか」

「…会長とお近づきになればいつかは指名してもらえるかもな。でも先ずは役員の中に入んねえと。まあ諦めんなよ、柴崎」

「…………ヤダな、励まされなくても別に泣いて…なんかない…から…」

楔月学園には、『蓮神会』れんじんかいという組織が存在する。

平たく言えば生徒会と同義である。

顧問教師5名、会長、副会長、書記3名、会計3名、庶務20名と、少々規模も大きい。

しかし当然である。楔月学園は小中高一貫一（蓮神会に参加出来るのは中等部3年から）。それに、ここ65番区の管理を任される、区内の『最高等教育機関』なのだ。それにより、校外からも依頼等が寄せられたりもする。

それを30名弱でこなすとなると、逆に少ない位だ。

そうなると必然的にそのメンバーは優秀さが求められるし、信頼があるに越した事はない。

メンバーの大半は、教師や生徒からの推薦である事が多い。その上で、やる気があると認められた者が、晴れて役員となれるのだ。

もちろん一般からも選挙に立候補する事は出来るのだが、当選率は極端に低い。当然、柴崎の様に邪なオーラをだだ漏らしている様な奴が当選するはずもない。

そして、柴崎が諦めきれない『副会長』の地位には、鴻籬が言う様に迦具土が居座っているのだ。これは『会長』が迦具土の『腕』を買っての直々の推薦一（本人のやる気は無視）なのだ…。

「——————チーっ。おい、ツッチー！」

「ん…………なんだ」

「なんだじゃなくて。当てられてんぞ」  
「……はあ？」

小さくも強めに声をかけられ目を覚ますと、静まり返った講堂、その前方中央には少しイライラした様子でこちらを睨む補習担当教師。

何時の間にか補習が始まり、何らかの問いを投げかけられたと迦具土は理解した（誰でもわかる）。

「……何？」

鴻籙に問いかける。

柴崎は自分と同じく聞いちゃいないと判断したからだ。起こしてくれたのは柴崎だが。

「『才覚者』の定義、だよ」  
「……」

それだけ聞くと、ゆっくりと立ち上がり、眠たげに頭を掻きながら、机からぴよこんと生えているマイクの電源を入れる。

「……『才覚波』を脳内でエネルギーの消費により任意に生産でき、それを自身の体内器官、通じては物体、自然現象などへ干渉させ、何らかの変化を生じさせる事が出来る者……です」  
「……よろしい。話はちゃんと聞いておく様に」

わかりません的な解答を期待していたのか、何やら納得のいかない様子の教師であったが、小さめに釘を刺して着席を促す。

寝ていたので注意も兼ねて当てたのに、普通に答えてしまったので注意するタイミングを失ってしまった、という所だろう。

「かつこいい」  
「るせつ」

類杖をつきながら憎たらしい笑顔で茶化す鴻籬をあしらい、再び机に突っ伏し夢の中へ旅立たんとする。

「やっぱ寝るんだ」

「ホント眠てえんだよ…勘弁してくれ」

「教師のメンツぐらい守ってあげなよ」

「…知った事か」

「君…実は中々の不良だよな」

「なんとでも言いなさい」

それだけ適当に答えると、迦具土は再び夢の中へ。

ちなみに、迦具土の左隣で、寝る訳でもなく、携帯ゲーム機でつかいかい竜と死闘を繰り返していた柴崎は、拳骨をくらい、携帯ゲーム機を没収された拳句、夏休みの宿題が倍になったのは迦具土の知る所ではない。

~~~~~

深く深く闇の深淵まで沈んだかの様にテンションの下がった柴崎と、それをなだめる鴻籬と講堂館を出て高等部校舎前で別れ

た。

(自業自得だろうに、バカめ)

本日分の補修が終わり、事の顛末を鴻薙から聞いた迦具土は、普段なら腹を抱えて笑い転げる所だが、柴崎のあまりの落胆ぶりに少々気が引けていた。

まあ、娯楽を奪われた挙句、元々山のように積まれた夏休みの課題がもう一山盛られたとなると、当の本人の気持ちが変わらないと言っほほど薄情でもない。

間違いなく自業自得なのだが。

そんな柴崎の手には、歴戦の勇者になれるデバイスはなく、歴戦の勇者も手こずるであろう課題の山がしっかりと抱えられていた。

(鴻薙もよく付き合うよな、あんなのに……。補修なんかいらねえくせに)

実は鴻薙、補修が必要な程成績は悪くない。かと言って特別いい訳でもなく、全教科、可もなく不可もなくこなす平均型である。

むしろ、出席日数や課題の提出、授業態度が完璧なため、通知表の成績は優等生の評価がついているくらいだ。

それにしても付き合いすぎるだろ。と、迦具土は思っている。

幼馴染らしいが、確かに一緒にいる頻度が高い。仲がいいのは当然いい事だが、(ひょっとしてそーゆー関係：?)などと、身の毛もよだつ様な考えは、ポツコボコにして心の奥深くに硬く硬く封印を施した。

「……………」

人間として必ずくる生理現象をバッチリ水に流し、講堂館側の入り口とは反対の入り口付近にある上階へ続く階段に足をかけた所で、外からかうつすらと叫び声の様なものが聞こえる。

(…子供…と…犬…?)

注意深く音に耳を澄ませる。

校舎に生徒が居らず、教師も職員室に閉じこもっているのだろう。完全に静まり返っている空間だからかろうじて聞こえる程の声だった。

方向は駅側。グラウンドや噴水の広場がある方だ。
柴崎と鴻薙が向かった方だが、気づいているのだろうか。

(……………)

迦具土は携帯を開き、時間を確認する。

そして小さくため息をつく、声のする方に歩き出した。

『蓮神会』の一員として、どんな小さな事だろうと異変には解決に尽力しなければならぬ。と、教師のメンツは守らない迦具土は、校則よりも面倒な蓮神会の規則を一応遵守する。

~~~~~

「……………」  
「ああ、凍也」

様子を見に来た迦具土は、なんかもう、それはそれはめんどくさい気持ちになっていた。

噴水広場の駅側の端、景色との調和のため人工的に作られた小さな自然の中にそれはあった。

一本の木の上にしがみついている純白のワンピースに身を包んだ、長く美しい桜色の髪を持つ子供。印象としては少女だ。

その木の下には満面の気持ち悪い程晴れやかな笑顔で両手を広げている柴崎。

そして吠えまくる犬。木上の少女にというより、柴崎に吠えまくっていた。明らかに。

傍のベンチに腰をかけて眺めていた鴻籬が、迦具土に向けて手をヒラヒラとさせた。

「何…これ」

「ご覧の通りさ。僕らがここを通ったらその木にあの子がね。あの犬に追われたのかな。それをアキが助けようとしてるのさ」

「ああ…そう」

犬に吠えまくられている柴崎と木上の少女が、「さあ大丈夫だよ。お兄ちゃんが受け止めてあげるからね!」「イーヤードー!気持ち悪いー!!」などと、不毛なやりとりをしていた。

「ホントに…?」

「本当さ。確かに最初は、あの子は木の真ん中あたりにコアラみたいにしがみついていたけど、アキが助けようとしたらあんなとこまで



そしてグイツと、半ば強引に引つ張られて落下すると、お姫様抱つこの形で受け止められた。

普通ならびっくりするだろうが、少女はまだ少しポカンと宙を見ていた。

改めて近くで見た少女に、迦具土は少しの不安を感じた。

目測での歳は10前後、腰まである光る様な桜色の髪、ルビーの様に透き通る真紅の瞳、シミ一つない純白のワンピース。しかし、その足に靴がない。

(裸足…。それだけじゃ分かんねえが、まさか『ロストチルドレン』じゃねえだろうな)

『ロストチルドレン』とは、捨て子である。

その多くは都外からの捨て子で、『神都なら大丈夫』といった気持ちで犬猫の様に我が子を捨てて行く身勝手な親がたくさんいる。

ロストチルドレン用の保護施設だけで、2つ程の区が機能している。

神都では深刻な社会問題となっているのだ。

「あの…えと…」

迦具土の怪訝な視線に気づいた少女が口ごもり始めた。

それもそつだ。今もまさにお姫様抱っこ状態なのだから。

「あ、ああ、すまん」

裸足なので地面に降ろすのを少しためらったが、流石に抱えたままというのもおかしいので、ゆっくりと足から降ろした。

「凍也…その子…」

「…わからねえ。けどなんとも言えねえな」

鴻籙も同じ懸念を抱いたのだろう。どう対応すればいいのかわからないといった顔で聞いてくる。

（裸足つつつても、ただ遊んでただけかもしれないし、別にそれ自体は珍しい事じゃねえ。ただ…何だ…？何か…違う…？）

迦具土はこの少女に対し、妙な焦燥感の様なものを覚えていた。それに伴い、えもしれぬかすかな不安、胸のあたりに感じる微弱な圧迫感。

この少女は『異なる』存在だと、本能が告げている様だった。

迦具土が顎に手を据え、思考に更けている間、鴻籙が少女に視線を合わせ話をしていた。

「凍也」

「ん？ああ、悪い。何だつて？」

「何でこんな所に居たのかって事しか聞いてないけど、駅前で野良犬の尻尾を踏んづけてしまって、それで追ひ回されてたらしいよ」「またベタな…」

迦具土がちらつと犬の方に目をやると、倒れている柴崎の頭の辺りで片足をあげていたが、（あ、オスなんだ）と思う事にした。

そして迦具土も少女に視線を合わせる。

「えっと…名前は？」

「……マリア…です」

「マリアちゃんか。お父さんかお母さんは？」

「いま…せん」

「……ッ……そっか…ごめんな。どこから来た？」

「……」

すると少女は腕を上に掲げ、空を指差した。

「……ん？」

「……」

そこまで自分の事を示すと、マリアと名乗った少女は黙ってしまった。

言いたくないというよりは言っていないのかわからないといった表情だ。

「……どうするんだい？凍也」

「…わからねえな。とりあえず蓮神会で保護する。名前がわかったんだ。『リスト』が使えれば身元は判る。会長と相談するさ」

「そっか。じゃあ任せるよ。僕らはこれで」

「おう、じゃあ……」

「探しましたよ……姫」

「……ッ!？」

唐突に背後から声がし振り返ると、5 m程後方に、赤紫の

髪にアメジストの様な深い紫の瞳、男性用の修道服の様な物に身を包んだ若い印象の男が立っていた。

(気づかなかった…?こんな近くに来るまで? ———— いや…)

いつから…この人数に囲まれていた…?)

迦具土、鴻雑、少女を中心に、謎の男と同じ様な距離で等間隔に10人弱に囲まれていた。

顔は話しかけてきた男しかわからない。他の10人弱は全身を修道服の様な物に包んでおり、フードを深々と被っていて顔がわからない。

「凍也…ッ」

「まで、動くな」

身を乗り出した鴻雑を左手で制し、迦具土は前方の男を見据える。

「ケツアル…」

「……?」

少女、マリアがつぶやいた。この男の名前か?…と迦具土は思考を巡らせる。

ケツアルと呼ばれた男は、その整った顔に不適な笑みを浮かべている。

「さあ姫、そろそろいい加減に家出はお終いですよ」  
「う…うるさい！あんななんかに『コレ』は渡さない！」  
「…『下界』が『罪』に溢れても構わないと？」  
「…ッ！…あんたに渡すよりマシよ」  
「……………」

目の前で訳のわからない話が進んでいる。迦具土にはどうする事もできなかった。どうすればいいのかわからないのだ。

そして当の二人の間には、迦具土と鴻雛は存在すら認識されていらないような雰囲気である。

(なんなんだこいつら…？どっかの演劇部かなんかか？訳わかんねえ事をベラベラと…)

隣の鴻雛もついていけないといった顔で見据えていた。

\_\_\_\_\_ ヲン…。

( \_\_\_\_\_ ツ？ )

大型の機械の電源を入れるような音とともに、男の手の中に一振りの剣が現れた。

いや、剣と呼んでいいのか。形は剣を形どっているが、無機質な鋭さはなく、触手の様に『蠢いて』いる。

「王は決断なされました。貴女がどうしても戻らないと言うなら、『聖杯』だけでも回収せよ。とね」

「嘘ッ！もしそうだとしても、あんたにその任を任せるはずがない！」

「さあ…誰でもよかった」んじやないですかね？」

「ッ！——貴…様……！」

マリアがその可愛らしい顔を憎しみや怒りといった負の感情に歪めた。

それを見た男はまた不適な笑みを浮かべる。

迦具土は一連の会話や二人の表情、語調などを観察、対応策を迅速に行使用する。

「鴻雛。柴崎と犬つころ連れて離れてくれ」

「…この子は？」

「あの男の狙いは間違いなくこの子だ。それにお前も見たる、あの武器の現れ方。もしあの男の『力』がお前と同系等だとしたら、荷物を抱えて逃げる形になるお前は確実に不利だ。ここは俺がなんとかする」

「……わかった」

シュンッ。と乾いた音がしたかと思うと、鴻雛はおろか、

柴崎も犬も、すでにその場から『消えて』いた。

「さあ姫、大人しく帰りましようか。私とて貴女のその体を消し飛ばすような真似はしたくないのです」

「——ッ！」

グジュル…と、生々しい音をたてる剣を持つ男は、両手を広げゆっくりと接近して来る。

その顔を不気味な殺気を撒き散らす仮面に変えて。

「……………待てよ」

迦具土は男の前に踏み出た。握った拳を突き出せば当たる程の距離。少し見上げる様な形でメンチを切る。

迦具土は170前半程の身長があるが、迦具土の頭頂部は男の顎の辺りだ。2mあるだろうか。久々に見た身長差に、少し威圧感を覚えた。

「…なんだ貴様」

「なんだはねえだろ。ずっと目の前に居たんだからよお」

「ゴミに興味はない。どけ」

「随分な言われようだなオイ。小さな女の子にそんなモン振り回そおとしてるお前こそ、人としてゴミクス当然だろおが」

「……………愚かだな。神に齒向かうとは」

「あ?—————!」

何言ってるんだ電波野郎と言う前に、迦具土の頭上から狂気の剣が振り下ろされていた。

(2) (後書き)

はいごーも。羽崎ですよ。。。( )ノ

え?「黙れ羽虫」ですって?

ジャツジメントに訴えてやるうう!

(「。口。」「ふジャツジメントおおお!

はい。前回からジャツジメントの件が鬱陶しいのでやめます。

羽崎こと羽虫のお話はどーっスか?

一応頑張っておりますよ。と言っても結局は自己満足ですがね。(。  
)

バトルが書きたくてウズウズしているにも関わらず、動きなどをど  
う書けばいいのかよくわからないと言っね。

どーしたもんやら>( )・( )<

でもまあ頑張ります。。。( )ノ

でわ(。・。)

『才覚者』。

この神都に存在する『特異な力』を持つ者。

脳内にて異常な脳波『才覚波』をエネルギーの消費によつて任意に生産し、体内器官や物体、自然現象などに干渉させ、変化を生じさせる事ができる者。

筋肉に干渉させる事で筋力強化、骨に干渉させる事で骨密度を変動して耐久性の向上、内臓に干渉させる事で免疫力強化…など、その効果は多岐に渡る。

体内器官以外では、手を使わずに物体を動かしたり、植物の種の成長を急速に促進させたり、小規模な風を起こしたりなども可能である。

また、己を己と確証するための『自己理想郷』ピア・パーソナルを確立している者は、才覚波による現象を『超能力』として昇華させる。

『小物を少し動かす程度の能力』は『念動力』サイコキネシスへ。

『小さな火を灯す程度の能力』は『発火能力』バイロキネシスへ。

『考えがなんとなく分かる程度の能力』は『心理掌握』サイコメトリーへ。

それぞれが確立するピア・パーソナルによつて、発現する超能力は異なる。

そして、どの程度の超能力が発現するかも、それぞれが確立するピア・パーソナルにかける『想い』や『信念』といった、精神的な物が強く呼応する事が分かっている。

そして――。

「ギイイン!」と、時代劇で刀と刀をぶつけ合う様な音が響いた。

「ッ？」

蠢く剣を振り下ろした男は、目の前で起きた現象に戸惑っていた。

左肩辺りから斜めに真つ二つにしたと思った少年には、傷一つついておらず、それどころか少年の右手に突如現れた、鏢の無い『氷の刀』に蠢く剣が受け止められていた。

「……………」

「…何ビビってんだよ。『いきなり氷が現れた事』か? 『たかが氷に剣が受け止められた事』か?」

男は訝しげに眉を寄せ、迦具土は余裕の笑みを浮かべる。

「神都じゃ別に、珍しい事でもねえだろ」

ギイイン!と、一際強い音が響いた。

上から押さえつけられる形になっていた迦具土が、上空に拳を突き上げる形で剣と剣をぶつけていた右手を激しく横に屈んだ。それにより男の右腕が剣ごと激しく後方に弾かれた音だ。

男は素直に驚いた。

人を真つ二つにするというのは、切れ味のいい剣があった

とて簡単な事ではない。

ギロチンの様に圧倒的な質量で叩き切るならまだしも、剣ごときで真つ二つになるほど、人の体は脆くはない。

だからこそ男は、涼しい顔をしていても、『叩き潰す』くらしい力を込めていた。

それがいとも簡単に受け止められた拳句、弾き返されたのだ。

迦具土にとっては、氷の刀の発現と同時に、才覚波を生産し、右腕・僧帽筋・胸筋・背筋に干渉し、単純な腕力を向上させていたに過ぎないが、その仕組みを知らないのであれば驚くのも無理はない。

「ハア？」

ヒュツ！と、氷の刀が空を切った。

右下から左上へ、鋭い剣閃が突き抜けたが、手応えは全くなかった。

臃な残像を残し、男は10m程後方に移動していたのだ。

「——ッ！！！」

しかし、男に体制を立て直す暇はなかった。

男の視界は突如、夕日より鮮やかな橙と紅に染まる。

当然、そんな時間ではない。

—— 2mにもなるうかという男の全身が、『紅蓮の炎』に包まれた。

「ぐおー！」

炎に包まれただけのはずの男の体は、大きく後方に吹き飛ばされた。

迦具土の左手から発せられた小さな『火種』は、圧倒的な質量・熱量で燃焼し、空間すらも飲み込む形で次々と連鎖的に発火を起す。

もはや『爆発』と呼ぶべきそれは、巨大な『熱の壁』となつて男に叩きつけられた。

炎と氷。正確には『一定空間の気温と湿度、酸素及び水素の密度操作』。

そして、炎と氷という両極端の力を振るい、敵を蹂躪し殲滅するその超能力は、『燃える氷』になぞらえ、こう呼ばれる。

能力名、メタンハイドレイド『紅蓮氷河』。

「おいおい、終わりかよ。俺はまだ一步も動いてねえぞ?」

迂闊に動ける状況でもねえが…と、言葉を発しながらも思考に付け加えながら、前方に倒れている男を注視する。

相手は一人ではない。今この状況にも、迦具土とマリアという少女は10近くの人間に囲まれている。

しかし…。

(……全く動かねえ。…そもそも生きてんのか?)

周囲の人影には、『存在感』こそあるものの、置物の様に微動だにしない。『生气』というものが微塵も感じられないのだ。

(……操られてんのか?それとも本当に人形か何か……。だとしたら『マリオネット操人形劇』? テレポート系の能力と共存することはないはず……)

「フ……フハハハハ……ハハハハハハハ」

「!」

倒れたままの男が不意に笑いだした。

そして、メキメキメキ……。と、軋む様な音をたてながら、重力を無視した動きで、起き上がり小法師の様に起き上がる。

「なるほど……。『神都』か。確か三貴神さんきしんとやらが創ったという。それなら稀有な力を持つ人間も珍しくはないか」

「……………」

「……くだらんな」

男がその右手を、蠢く剣を掲げると、まるで花が開く様に剣が割れ、毒々しい程の紫の炎に包まれた『剣身』と呼べそうな形をした物が現れた。

「人間相手に使う事などないと思っていたが……ちょうどいい、試しておくでしょう」

「……………」

バサバサバサ……。と、乱暴に衣服を脱ぎ捨てた様な音がした。

迦具土が振り向くと、周囲の者達が身に纏っていた修道服の様な衣服が抜け殻の様に乱雑に地面に落ちていた。

かろうじて視界に捉えたのは、修道服の顔の辺りから、青白い『何か』が抜き取られる様に出て行き、完全に出きつたところで周囲と同じく、乱雑に衣服が落ちるところだった。

そして、抜き取られた『何か』は、紫の炎に包まれた剣へと吸収されていく。

周囲の人数分の『何か』を吸収し終えた剣は、花卉の様に開いていた元剣身を、男の腕へと巻きつけていく。

「———ウン……。」という機械の始動音の様な音を迦具土が認識した時には、すでに男は迦具土の目の前で、その禍々しい剣を振りかざしていた。

「———ツ……！」

避けるのは間に合わない。そう直感的に判断した迦具土のたった行動は『受け止める』だった。

だが、この判断を愚かな判断だったと悔いる事になる。

「———キンツ。と、フォークとナイフを打ち合わせる様な軽い音と共に、剣をも受け止める程の硬さを誇る迦具土の氷の刀は、あっけなく切り捨てられた。

それと同時に、左肩から右下腹部へ、焼ける様な鋭い痛みが突き抜ける。

体が二つにならなかったのは、氷の刀が切られた瞬間に、

本能的にバックステップをしていたからか。

「……………ッ？」

痛みに対する叫びをあげる前に、次の異常が始まる。

傷口から噴出する血液が、先ほどの『何か』と同じ様に、紫の炎に包まれた剣へと吸収されていくのだ。明らかに傷口に見合わない程の量の血液を引き摺り出して。

何が起こっているのかわからないが、これ以上血を吸われるのはマズイ。そう判断した迦具土は、倒れゆく体で受け身を取ろうともせず、応急処置を始める。

まずは才覚波を大量に生産。それに伴うエネルギーの消費も鑑みるべきだが、今はそんな暇はない。

生産した才覚波を、大脳の『中心後回』へ干渉。『外部からの刺激を痛みとして認識』する機能を抑制。自身の体を、一時的に麻酔にかかった状態に。

さらに、全身の骨、主に骨盤の『腸骨』に干渉。骨髄の『造血作用』を急速に強化・促進。失血死の可能性を下げる。

そのまま下半身の全ての筋肉に干渉。脚力を瞬間的に超強化。地面を蹴りつけて宙へと翻る様に後方へ移動。『血液を吸収する』剣の効果範囲から脱出した。

この間、およそ3秒。これは迦具土の実戦経験、体内構造の熟知、生産可能才覚波の絶対量の多さにより実現できた『技術』と言えるだろう。

（……………痛ッ…。…マズいな…）

並の才覚者には到底できない技術を見せつけたが、事態は何一つ好転してはいない。

痛覚を遮断しはしたが、最初に受けた痛みの余波が重苦し

い痛みとして全身を包む。

傷口に才覚波を干渉し、血液の凝血作用を強化した。これにより出血自体は止まっているが、あまりの出血量に造血作用が追いついておらず、視界が眩む。

斬撃を受けた際に鎖骨を切断された、もしくは砕かれたか、左肩が全く動かない。

そして立ち位置。大きく後方へ移動したため、自身と男の間にマリアを置く形になってしまっていた。護衛対象を敵の前に差し出すという、普段なら絶対に冒さないミスだった。

「ケツアル……あんた…ッ」

敵の前に晒された少女は、それでも力強く男を睨みつけていた。

「ははっ。中々おもしろいですね姫。人間は『血』が『魂』の象徴であり、『罪』の証とも言つのでしょつかねえ」

「何…考えてるのよ…。実体を持つ人間にそんな物振り回すなんて…ッ」

「おやおや、そんな恐い顔しないで下さいよ。好奇心ですよ、好奇心」

「……………」

少女は力なく俯き、だまってしまった。

その手は強く握りしめられ、小刻みに震えている。

言い返せないのだろうか。道徳的な観点から追及すればいいくらいでも言つ事はあるはずなのだが。

少し振り向き、横目に迦具土を見た少女は、申し訳なさそうに目を瞑った。

「……………」

その顔は当然、迦具土にも見えていた。  
そして、迦具土がその『決断』をするのは、それだけで十分だった。

「さあ姫、帰りましょうか。いや、還りましょうか」  
「……………」

「……………」  
「ゴメンな」

「……………」  
「ブウン！と、長い物を無理矢理振り回した音が響く。」

それと同時に、少女の体が宙に浮く。

「ふえ？」  
「なっ？」

「ザッパアアン！！と、少女は近くの噴水の中へ一直線に落ちて行った。」

「迦具土の手には、物干し竿を限界まで伸ばしたよりも長い『槍』が握られていた。」

「使い物にならなくなっていた左の鎖骨を、氷でつなげる事で無理矢理動くようにした。痛覚を無視できる今だからできる芸当だ。」

そのまま即座に槍を生成。少女の服に引っ掛け、投げ飛ば

した。

怪我をしないか懸念されたが、今は少女を噴水に放り込むのが『安全』だと判断した。

「貴様あ？」

「はっ。叩つ切るおとしてたお前に、激昂する資格があんのかよ」

迦具土は右腕を水平に横へ。槍を手放すと、空気へ溶け込む様に解けて消えた。

「よかつたなあ。見ず知らずのヤツに見せんのは初めてだぜ？」  
「……」

「おおあああああああああ！……！」

ゴオオ！と、腹を震わせる様な重低音を響かせながら、迦具土の右手から尋常じゃない程の質量の炎が噴出する。そしてその炎は、太陽のプロミネンスの様に迦具土の手へと戻って行き、手の中で何かを形どっていく。

通常、迦具土が力を使う際、炎なら、酸素密度を操作し、相手へと濃い酸素で出来た『酸素の導火線』を作り、湿度を下げ、温度を極限まで上げる事で自然発火を起こして導火線に着火させる。氷なら、酸素と水素の密度を操作し、水分子を生成。湿度を上げ、温度を極限まで下げる事で氷を作る。さらにそれを年輪の様に何層にも重ねゆく事で、鉄の様な強度を作り上げる。

『才覚者』はあくまでも『超能力者』だ。『魔法使い』などではない。

質量保存の法則は絶対だし、物理法則も軽々と無視はできない。テレポートの様な例外もあるが。

当然、無から有を創り出す事などできないし、物質を異なる物質へと作り変える事はできない。紙から鉄は作れないのだ。

しかし、今の迦具土はこの全てを無視していた。

自然発火ではあり得ない程の量の炎。さらにそれを不自然に捻じ曲げる。そしてその炎は、迦具土の手の中に何かを創り出す。非物質のはずの炎が、物体としての実体を持つ何かに。

「なんだ…それは…」

炎の噴出が収まり、迦具土の手には一振りの『刀』があった。

今までの氷の刀とは違い、鍔もあるし、刀身もれっきとした金属である。その刀身は、相当な熱を帯びているのか、ポツポツと周囲の空気を発火させていた。

赤黒い柄の先端からは、橙色の紐が伸びており、さらにその先端には、ルビーの様な真紅の珠がついている。

「なぜ貴様が…『神器』<sup>じんぎ</sup>を持っている!！」

「……うるせえな。知るかよそんなモン。これ出すの疲れんだ。一瞬で終わらせるぞ」

神器とは何かを聞いたただしかったが、すでに迦具土は疲労困憊。面倒事は少しでも避けたかった。

腰を低くし、居合い斬りの姿勢で力を込める。言葉通り、『一瞬』で終わらせるために。

「ああ、加減は出来ねえからさ、死にたくなかったら頑張れよ」  
「ッ？」

「じくえん いちもんじ 獄焔・一文字」

ヒュッ！と、迦具土の刀が真横に一直線に振られた。  
その時点では何も起こらず、馬鹿にされたと思った男が、  
迦具土を斬るための所動を起こそうとした——その時。

——ツボガアアアア！と、迦具土を起点に、刀を振った軌道になぞる様に扇状に『爆発』が起きた。プラスチック爆弾を扇状に敷いて爆発させるのを想像するとわかりやすいだろうか。

測った場合、長さは20m程あるだろう。爆発に『厚さ』という概念はないだろうが、これも測った場合は30cmあるかないか。

その『爆炎の扇』は、迦具土の視界にある木々の、少し離れた位置にある噴水の像の、真ん中辺りから上を吹き飛ばした。  
そして…。

「ゴッ……ガッ……！……」  
「……だから『頑張れ』つつたじゃん」

パシュッ。と、迦具土の刀が光の粒子となって霧散した。  
男のダメージは、誰が見ても深刻だった。  
口からは酷く粘着質な血液が溢れ、腹部は当然ズタズタ。

『腹部に爆発が当たった』ではなく、『腹部も含めて爆発した』のだ。外も中も激しく掻き乱された。無傷な臓器はないし、元の位置にあるかもわからない。

直撃したので迦具土も内心肝を冷やす思いだったが、体が『千切れて』いない所を見ると、何らかの防御をしていたのか。

男は、自身が吐いた血の中へと倒れた。それと同時に、男の持っていた剣が地面に突き刺さる。

(……これで懲りたる。とりあえず……『黄泉の門番』に預けりゃなんとかなるか)

迦具土がポケットから携帯を取り出し番号をプッシュする。

コール音が鳴っている時に、少女が噴水の淵から頭を覗かせていたのが見えた。安否確認が出来たので電話に専念する。

『……はい?』

「ああ、先生?俺。迦具土だけでも」

『……僕個人用の携帯番号……教えたっけ?』

「まあまあ。ちょっと時間なくてさ。急患一人お願いしますわ」

『……あのね……今日はものすっごく久しぶりのオフなんだよ?』

「あんたいつともオフでしょ。社会的に」

『……なんか疲れちゃったなあ』

「おおおいおい、すみませんすみません、マジで急患なんだって。」

迦具土が振り向くと、そこにあるはずの男の体は無く、剣も消えていた。

「……やっぱいいや。オフを満喫しておくれ先生」

『え?ちよっ——』

無理矢理電話を切り、身構える。

10秒ほどで身構えを解く。男は『瞬間移動<sup>テレポート</sup>』の力を使っていた。攻撃するつもりなら、電話中にいくらでも出来たはずなのだ。

(…逃げた？反撃のチャンスならいくらでもあったのに？……まあ、逃げる元気があるなら大丈夫か)

——ブブブブ…。と、携帯のバイブが作動する。

「ん？——！！！！！」

着信。その画面には『会長』と表示されている。

「……………やべえ……………」

真夏の午後。

迦具土はこの一瞬で風邪をひいたかのように身震いし、命のやりとりの時よりも嫌な汗が身体中から溢れ出た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4717x/>

---

神理郷 ~ゴッドピア~

2011年10月26日04時07分発行